

# 様性テーマに趣向凝らす

世界史一人類全体の歴史を書くにはいろいろ工夫がいる。かつては民族史のように、現代文明を到達点にして大きなストーリーに展開することができたが、「二十世紀の後半」この描き方には批判が出て、著者は趣向を凝らさなければならなくなつた。その中でも本書は凝った方だ。

テーマは多様性と競争であると著者は言つ。章立ては、まず石器時代から文明の発生が述べられる。次に

ユーラシア大陸の諸文明がオリエント、インド、中国、地中海世界、ヨーロッパと語られる。そして最後にまとめとしてイスラム文明、ヨーロッパ世界の拡大、さらに近代世界と文明均質時代の趨勢が据えられてゐる。

ちょうど博物館で各部屋を回る感じだが、それぞれの部屋は三つの視野に整理されている。まず比較的長

Michael Cook 1940年生まれ。  
「リンストン大学教授。著書に『ムンマド』『コーラン』など。



マイケル・クック著  
千葉喜久枝訳（柏書房・一九四〇年）

解説され、③ではその世界のちよつと面白い話題がコラム的に語られてゐる。例えば第十三章の「ヨーロッパ世界の拡大」では、ユーラシア大陸から主に海路による世界全体への

なる非ヨーロッパ世界の植民地化の話で終わらず、マヤ、コンゴそして日本の比較文明論があるのみならず、③の「喫煙タバコ」で新大陸伝来のタバコと磁器や、シナ趣味の意匠などが結合した「鼻煙壺（喫煙タバコ入れ）」が紹介される。

全体として、前半はJ・ダイアモンド「銃・病原菌・鉄」のリメイクの印象があり、失望しかけるけれども、途中のインドあたりからがぜん面白くなつてくる。著者がイスラム思想史の専門家なので、その纏蓄が各所に披瀝されており、例えば、イスラムと中国の役人観の違いなど、

# 外国暮らしの深刻さ報告

離婚は結婚より何倍もエネルギーがいることよく言われる。その離婚が日本人同士ならまだしも外国人が相手だったらどうなるのか。本書はグローバル化が進む現在、文化の違いや法律の壁等々、離婚の現状をまず知るために必読書であることは間違いない。著者自身も国際離婚の経験者だ。「国際離婚を語りあう会」をネットに立ち上げ、様々な活動をしている。それに国際結婚への助言から破綻した時のノウハウまでかなり具体的に書かれていて説得力がある。

国内の国際離婚件数は右肩上がりで八割が日本男性とアジア人女性によるもの。本書は日本女性の国外での国際離婚を主に扱っている。

日本人女性の国際結婚数は、一九八〇年には七千二百六十一件だったものが、二〇〇三年には三万六千三



国際離婚

松尾 寿子著（集英社新書・七一四円）

十九件まで急上昇した。その背景に、留学やワーキングホリデーを利用して海外在住する女性が増加しているほか、来日する外国人男性も増えていることがあげられる。男女平等、エスコート上手、情熱的等々、日本男性にないものを求めて欧米系の白人男性との結婚に憧れる女性が多い。言葉も十分に話せず、相手方の国に移住した場合にトラブルが多いようだ。夫からの暴力（DV＝ドメスティック・バイオレンス）に悩むケースが多い。DVは国

籍、人種、職業、学歴に関係なく起きると著者はい。夫婦ゲンカをして夫が警察を呼び、妻の方が留置所や精神病院に入れられたり、子供の親権を取られたりといった深刻な事態も複数報告されている。夫の暴力にカツとなつて妻は応戦しないこと、妻の反抗を外国の男たちは簡単に許さないというのだ。

また外国人男性は日本の男性のように給料を妻に渡す習慣ではなく、女性も経済的に自立して当然と考える。だが外国暮らしは移民になることを意味し、就業機会の少なさ、健康保険などの問題、差別等々を覚悟する必要がある。最善策は、「孤獨」に陥らないこと、だそうだ。

見（都留重人監訳、岩波書店、品切れ）やサミュエル・ハンチントンの「分断されるアメリカ」（鈴木主税訳、集英社）など、白人の間には、一

した多様性の共存といつ認識へと到達できるのかという、もう一つのハードルが顔を覗かせている。

（すすぎ・とおる）慶應義塾大学教授。来週に続く）

石内都写真集『マザーズ

2000

わかる  
名著